

地域学習および「地理総合」の実践に向けた教員研修のあり方 —教員免許状更新講習におけるフィールドワーク—

松村 啓子

宇都宮大学共同教育学部教育実践紀要 第7号 別刷

2020年8月31日

地域学習および「地理総合」の実践に向けた教員研修のあり方[†]

—教員免許状更新講習におけるフィールドワーク—

松村 啓子*

宇都宮大学共同教育学部*

2022年に必履修化される高等学校「地理総合」の質保証を行うために、その前段階である小・中学校社会科における地理学習の充実が急務である。本稿は、筆者が教員免許状更新講習において取り組んできた、教員の地理的な資質・能力の向上を目指す地理情報の活用と、2019年度の講習で導入したフィールドワークの内容を詳述したのち、講習で得た知見を地域学習の実践の場はどう生かすかという観点から、受講者のワークシートを分析した。受講者は、フィールドワークの経験をつうじ、観察・調査の視点を設定すること、事前・事後学習において地域の歴史の変遷に関する地理情報を活用することの重要性を学び、児童・生徒自身が体験をととして地理の楽しさに気づけるような授業実践への意欲を増大させた。

キーワード：地域学習，地理総合，フィールドワーク，教員免許状更新講習

1. はじめに

2020年度に小学校、2021年度に中学校においてそれぞれ全面实施となる新学習指導要領、ならびに2022年度の高等学校における「地理総合」「地理探究」の新設に向けて、地理教育関係者の間では望ましい学習内容や方法の転換、教員養成のあり方に関する議論が活発化している⁽¹⁾。とりわけ、高等学校の地理科目として概ね40年ぶりとなる「地理総合」の必履修化は、地理教育関係者の悲願であり、頻発する自然災害に対し、身近な地域の防災対策を具体的に考察し、グローバルな視座から地球規模の諸課題の解決策と国際協力のあり方を探るといった地理教育の有用性を、広く知らしめる好機ととらえられている。一方で、高等学校で「地理」を未履修、あるいは大学で地理学を専攻せず、地理に苦手意識をもつ相当数の社会科教員が「地理総合」を担当することが見込まれる。それだけに、教師が生徒に「地

理嫌い」を伝えていく事態を招かぬよう、いかに「地理総合」の質保証を行っていくかが差し迫った検討課題となる。

加えて新学習指導要領では、「社会的事象の見方・考え方」の連続性が強調されるように、小学校から高等学校まで一貫性のある地理教育の重要性も説かれている。竹内(2018)は、「地理総合」の成否は地理歴史科教員だけが鍵を握るのではなく、それに先行する小・中学校における社会科(地理)学習の質が大きく影響するととらえた⁽²⁾。井田(2016)は地図学習を例にとり、現状では小学校から高校まで何をどこまで身につけさせればよいかという目標が示されておらず、地理的スキルの段階的な育成が図りにくいことを指摘した⁽³⁾。香川(2019)は、中学校社会科地理的分野において生徒が苦手意識を生じやすい点を導出し、中学校教員の資質向上のためには教員養成においても、何が必要かを見極めたうえで収集した統計や資料を活用して考察し判断する能力、学んだ地形を大縮尺図で読みとれる能力、各々の気候区分と産業の特性とを関連付けながら説明できる融合的思考を育てておくべきであると主張した⁽⁴⁾。いずれの論者も、現職教員の授業実践力を底上げするための研修制度や講習会の充実を訴えている。

筆者は、2008年の予備講習を含め、2019年まで

[†] Keiko MATSUMURA*: Improvement of Local Area Learning in Social Studies through Fieldwork on Certificate Renewal Course
Keywords: local area learning, geographical education in high school, fieldwork, certificate renewal course

* Cooperative Faculty of Education, Utsunomiya University
(連絡先: kwmatu@cc.utsunomiya-u.ac.jp)

に宇都宮大学が開設する教員免許状更新講習（選択領域）を8回担当した。新学習指導要領において、社会的な見方・考え方を働かせた課題解決的な学習の充実が望まれていること、また新科目「地理総合」が地図・地理情報システム（以下、GISと略す）、ESD、防災、地域調査などを学習内容の柱としていることに鑑み、2018年以前より実施していた地形図の読図、地図・空中（衛星）写真を用いた地理教材の作成に加えて、2019年の講習では観察を主体とするフィールドワークを初めて取り入れた。本稿では、筆者が実施した2018年以前と2019年の講習について詳述し、事後アンケートと2019年受講者のワークシートを分析し、高等学校「地理総合」と、それに連なる小学校・中学校の社会科の地域学習の質を向上させるにはどのような手立てが必要かを考察する。

2. 教員研修に期待される地理的資質・能力の向上

地理的な資質・能力の向上をはかる教員研修について言及した論文に、地理学会主催の教員研修を詳述した泉・岩本（2012）⁽⁵⁾、小・中・高の様々な校種の教員を対象とする講習の実践報告を行った竹内（2018）、植木（2018）⁽⁶⁾がある。竹内（2018）は、高等学校「地理総合」を支援する教員研修は小学校や中学校の社会科教員も視野に入れるべきであると考え、地理を専門としない小・中学校教員を対象に、身近な地域における地理的な調査・探究活動を体験させることにより、地理の楽しさを味わわせることを目的とする免許法認定講習を実施した。講習は2日間で行われ、講習会場周辺におけるフィールドワークの実施、見出した地理的事象にもとづくテーマ設定、テーマ解決のための情報収集、ゲスト講師によるGISを用いた調査結果の分析法の講習、調査結果の発表から構成された。本実践では、地域調査をとおして教材を自ら見出し、読み解くプロセスが重視され、教員の地理的な資質・能力の向上のためには、調査結果の分析・考察の方法を適切に指導することが重要であると説かれている。

植木（2018）は免許状更新講習を、地理を専門としない教員に地理を啓発・普及するアウトリーチと位置づけ、千葉県銚子地域を対象として、人と自然のつながりを体験できるよう、自然地理の内容を多く含むフィールドワークを実施した。講習は、徒歩（ブラブラ歩き）・バス・鉄道を併用した野外観察と、

地形図の読図、新旧地形図の対比、地形断面図作成、空中写真の実体視などの室内実習、振り返りのイラスト作成と発表から構成された。

いずれの講習においても、受講者は観察事象からの課題設定や地形図を使った演習に戸惑いを覚えながらも、実地で観察した事象を地理的な見方・考え方を働かせながら読み解くことに手応えを感じ、自身もフィールドワークを取り入れた授業を実践したいという意欲を持つに至っている点が評価されている。

以上のような小学校から高等学校までの地理の授業実践力向上を支援する教員研修においては、何も地図を読む力や、GISの活用、実地観察等の地理的技術の獲得のみが目的化されているわけではない。それらの知識・技能を体験的に学んだ上で、児童・生徒たちが地域をより深く理解できるような発問や、視覚教材の作成といった、具体的な授業づくり結びつくことが期待される。

また、「地理総合」の導入部分に位置づけられた「地図・GISの活用」は、地理学習の基礎的・基本的な技能を身につけ、体験的な活動をつうじて地理学習への意欲を高める意図がある。井田（2016）は、GISという用語に抵抗がある教員にも、PCモニターでの新旧地形図の対比は無理なく導入することが可能であると述べている。学校の情報環境に制約がある場合でも、異なる指標の分布を描いた透明シート等を重ね合わせ、指標間の相関を考察させる「アナログGIS」の教材や授業モデルも現職教員によって開発されている⁽⁷⁾。

教員自身が座学で自習することが叶わない地域調査については、研修や学会主催の巡検等の機会を活かし、地域の生きた素材に触れて学ぶことで大きな効果が得られる。栃木県内の中学校教員に対しアンケート調査を実施した井上（2019）によれば、中学校社会科地理的分野の「身近な地域の調査」の単元について、フィールドワーク（野外調査）の実践を行った経験があると答えたのは、74名の回答者の28.4%にとどまった⁽⁸⁾。大学在学時および研修・講習等で自身がフィールドワークを体験したことがある回答者は半数弱（45.9%）であり、地域学習・地域調査の指導に自信を持つためにも、より多くの教員がフィールドワークを体験することが望ましい。

それでは、実際の教員免許状更新講習において、GISの演習やフィールドワークはどの程度実施されているだろうか。教員免許管理システム運営管理協

議会が運営する更新講習検索サイト⁽⁹⁾によれば、2019年度の教員免許状更新講習のうち、GISの演習（国土地理院の「地理院地図」の利用を含む）を行うものが26大学で29講習、地理教育にかかわるフィールドワークを行うものは、13大学および（財）日本地図センターで23講習開設されていた。また、GISの演習とフィールドワークの両方を実施するのは9講習であった。2017年度のフィールドワークを実施する免許状更新講習は15講習であった（植木、2018）の比べ増加傾向にはあるが、教員が居住する都道府県内でフィールドワークを体験する機会を担保できるよう、地理学を専門とする大学教員は積極的な開講を心がけるべきであろう。

3. 教員免許状更新講習「児童・生徒の地域理解をうながす地理情報の活用とフィールドワーク」

本章では、筆者が宇都宮大学で担当している免許状更新講習の内容構成、および2019年の講習で実施したフィールドワークについて詳述する。

(1) PC端末による演習

選択領域6時間の「児童・生徒の地域理解をうながす視点と方法（2008年度～2018年度）」は、1. 地域理解の視点、2. 身近な地域を知る方法、3. 地理的情報の入手と分析、の三部構成である（表1）。2008年度当初より、PC端末が50台設置されている計算機演習室を会場とし、総合メディア基盤センターを通して受講者各自に臨時アカウントとパスワードを発行し、地図や空中写真の閲覧、簡易GISの操作、提出課題の作成に端末を利用してもらった。第1部の「地域理解の視点」は講義形式で、子どもの発達段階に応じた地域の捉え方の変化を解説したのち、学区区など身近な地域の学習のポイントを、講師の出身小学校周辺地域を事例に挙げて説明した。

第2部の「身近な地域を知る方法」では、国土地理院のWebサイト（2008～2009年度は地図閲覧サービス「ウオッチーズ」、2010年度・2012年度は「電子国土Webシステム」と「空中写真閲覧サービス」、2014年度以降は「地理院地図」）にアクセスし、地形図および空中写真の閲覧と読み取り、画像保存と加工、小学校「身近な地域や市の様子」や中学校「身近な地域の調査」の単元で使用する教材（ワークシート、提示資料）の作成を継続して行ってきた。その際に、講師が作成した配布資料にしたがい、地理院

地図の3D表示、地形断面図作成、空中写真やさまざまな主題図との重ね合わせを体験してもらった。

2008年度、2009年度は、講師があらかじめ受講者一人一人の勤務校が含まれる2万5千分の1地形図を複写し、作業用の地図として配布していたが、「電子国土Webシステム」と後継の「地理院地図」において多様な地理空間情報を利用できるように

表1 免許状更新講習の内容

<p>2018（平成30）年度</p> <p>I 地域理解の視点</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童・生徒の地域認識 ・身近な地域の学習のポイント <p>II 身近な地域を知る方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地形図および空中写真の入手 —地理院地図— ・旧版地形図の入手、統計地図の閲覧 ・作業シートの記入と「身近な地域に対する設問」のワークシート作り（課題） ・旅行記に描かれた「栃木県」 <p>III 地理的情報の入手と分析</p> <ul style="list-style-type: none"> ・訪問経験のない場所に関する情報収集 ・地域統計の入手 ・統計地図の描き方 <p>（簡易GISソフト MANDARA をもちいて）</p>
<p>2019（令和元）年度</p> <p>I 地域理解の視点</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童・生徒の地域認識 ・身近な地域の学習のポイント <p>II 身近な地域を知る方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地形図および空中写真の入手 —地理院地図— ・旧版地形図の入手、統計地図の閲覧 ・「身近な地域に対する設問」のワークシート記入（課題1） <p>III 訪問経験のない場所に関する情報収集</p> <p>IV 野外観察</p> <ul style="list-style-type: none"> ・グループ①～⑩に分かれて、北エリア・南東エリアのいずれかを選択し、1時間かけて観察（13：10～14：20） ＊衛星画像に記したチェックポイントを經由 ・グループでの観察内容の取りまとめ・発表（14：30～） ・個人のふりかえり（課題2）

なってからは、WordやPower Pointへの地形図・空中写真の切り出しと加工を指導した。2016年度以降は、講師が地理院マップシートを用いて受講者の勤務校の住所を緯度経度情報に変換し、校種ごとに異なる色のアイコンを指定してKMLファイル化したものを、宇都宮大学のe-learningシステム「教育学部Moodle」にアップロードした。これには、PCでの地図閲覧に不慣れな受講者が、自分の勤務校の位置を見失わずにすむ配慮とともに、県外を含むさまざまな学校の立地環境に関心を持たせる意図を込めている。受講者は当該KMLファイルをダウンロードし地理院地図に読み込み、小縮尺での分布図(図1)を概観したのち、自身の勤務校にズームインし、色別標高図や新旧の空中写真のレイヤーと重ね合わせて、周辺の地形や土地利用を読み取った。勤務校を中心とする3D地図の表示では、任意の視点からの地形の新たな見え方に、多くの受講者から驚きの声が上がっていた。

地理院地図とあわせて、新旧地形図の対比に適した時系列地形図閲覧サイト「今昔マップ on the

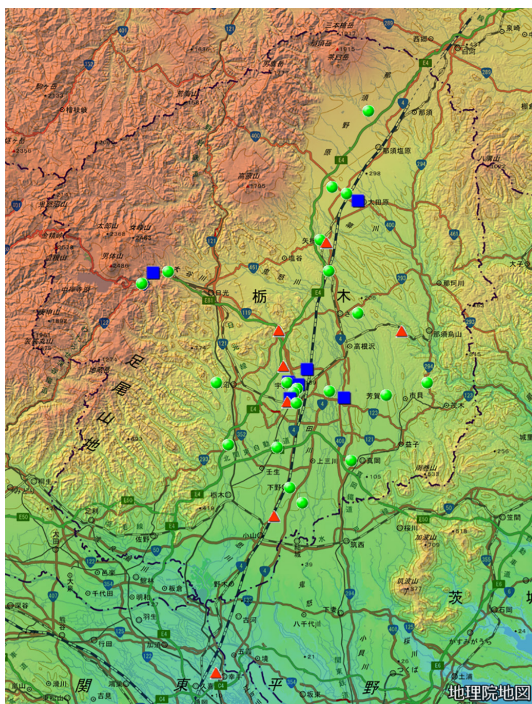


図1 2019年度受講者の勤務校

栃木県周辺に範囲を限り色別標高図(透過率30%)と重ね合わせて表示した。図中のアイコンは丸が小学校、三角が中学校、四角が高等学校および特別支援学校である。

web]、農業環境技術研究所の「歴史的農業環境閲覧システム」、大正・昭和初期発行の全国5万分の1地形図の高精細画像がダウンロードできるスタンフォード大学地理空間センター「Japan 1:50,000」など、教材作成に役立つコンテンツを紹介した。

さらに第2部では、1878年(明治11)に関東から北海道、近畿を旅したイギリス人イザベラ・バードの旅行記⁽¹⁰⁾をテキストに、近代黎明期の栃木の風景や人々の営みを、前述のウェブサイトで閲覧可能な旧版地形図や、長崎大学電子化コレクション「幕末・明治期日本古写真メタデータ・データベース」および「日本古写真高精細画像」の写真とあわせて読み解く授業実践を提案した。

第3部の「地理的情報の入手と分析」は、教師の訪問経験のない地域を対象とする社会科、地理歴史科の授業の準備に有用と考えられる、書籍、統計資料、WebGISでの統計地図作成について紹介した。計算機演習室の端末には、WebGIS「MANDARA」がインストールされている。2018年度の講習では、講師が用意したExcelデータを教育学部MoodleからダウンロードしてMANDARAに読み込み、栃木県市町村別の人口増減率や高齢化率の階級区分図(コロプレスマップ)を描く作業を体験してもらった。

以上の講習内容は、6時間分としては盛りだくさんであり、PC操作に苦手意識をもつ受講者の負担感が大きいことが課題であった。そのため受講者には、講習で学んだことを復習し、教材作成に活かしてもらえるよう、WebGISサイトのURLを記した配布資料のPDF、Moodleからダウンロードした統計データ、地理院地図を使って保存した画像等をUSBフラッシュメモリ等の記録媒体で持ち帰ってもらった。しかし、地理院地図のレイアウトが毎年のようにリニューアルされ、受講者に配布した地理院地図の活用マニュアルがすぐに古くなってしまいうという問題が残されている。

近年、総務省統計局の「地図で見る統計(jSTAT MAP)」や、経済産業省および内閣官房が提供する地域経済分析システム「RESAS」など、だれもがWebGISで簡単に統計地図を作成できる環境が整えられている。しかし、統計やGISに馴染みがない教師には利用のハードルが高いため、上記の「MANDARA」での作業に代えて、今後はこれら政府統計サイトで地図を表示させる作業時間を設けたいと考える。

(2) フィールドワークの実際

2019年度の免許状更新講習「児童・生徒の地域理解をうながす地理情報の活用とフィールドワーク」は、2019年7月6日に実施し、受講者は39名⁽¹¹⁾であった。2018年度までの講習の第2部と第3部の内容を精選し、「身近な地域に対する設問」を考える課題を、教材作成ではなく講師の用意したワークシートに記入する形式に改めて時間短縮をはかった。

本講習の第4部に位置づけたフィールドワークは、受講者を3～5名ずつの10グループに分け、所定のエリア内を観察してもらう形式を採用した。講師は、エリアの多面的な理解を促す事象を抽出し、その観察地点をチェックポイントとし、講習会場を出発しチェックポイントを回りながら1時間程度で戻って来られるエリアを2つ設定した。ここでは各々のエリアを宇都宮大学からの方位にもとづき「北エリア」と「南東エリア」と称する(図2)。

観察用には、6,250分の1～4,500分の1程度の地理院地図、都市計画基本図、2018年5月撮影の衛星写真の3種類の資料を用意した。講師の説明を聞いた上で、7グループが北エリアを、3グループが南東エリアを選択して観察を行った。チェックポイントは各々7つ設けているが、回る順番は自由とし、

7つのうち最も大学から遠い地点は、時間がない場合には省略してもよいと指示した。講師は出発前に、フィールドワーク後の振り返りの観点として、①エリアの全体的な特徴と、特に気になった事象、②エリアの中に「さかい」は見つけれられたか、③生徒・児童に観察させる場合には、どのような事象に関心を持たせたいか、の3つを提示した。①と②は地域の特徴を大づかみにすること、③は深い学びにつながる興味深い地域素材を見出すことを意図したものである。

北エリアは、宇都宮大学峰キャンパスと国道123号をはさみ北側に隣接する峰1丁目、2丁目、3丁目にまたがる。宇都宮大学正門前から国道123号を西に進むと、緩やかな下り坂となっているが、この坂は台地の中位面(岡本台地)と、下位面(田原台地)の境界部分にあたり、昭和初期まで西側の台地下位面は水田、東側の中位面は畑が卓越していた(図3)。エリアの西端を流れる江川沿いと台地中位面との高低差は明瞭である。北エリアの西寄りを南北に貫く市道沿いは、近世の嶺村であった当時の旧集落で、スギの社叢林に囲まれた鶏峰神社、広い敷地と鬱蒼とした屋敷林を有する旧家など、周囲の住宅地との景観的差異がきわだっている。また、大学の正

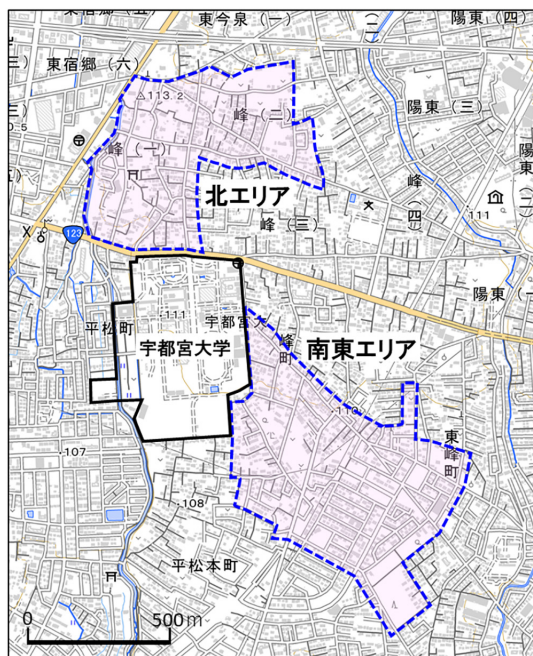


図2 2019年度講習におけるフィールドワークの範囲
背景地図には、地理院地図の淡色地図を使用した。



図3 宇都宮大学周辺の昭和初期の様子
1929年(昭和4)修正測図の2.5万分の1地形図から、図2の図郭の範囲を切り出した。白抜きの部分は畑である。

門からまっすぐ北に伸びる市道沿いは学生向けのアパートが多く立地するが、近年は幼稚園、民家、店舗などが取り壊され、新たにアパート、分譲住宅地、空き地などへ用途が変化している区画が目につく。さらに北エリアの北東端に当たる部分には、地形図では広い畑となっているが、実際には耕作放棄地が広がっている。

7つのチェックポイントは、①江川沿いと台地中位面との標高差、②周囲より高い場所にある鶏峰神社、③長屋門と屋敷林、④広い空地（未利用地）、⑤耕作放棄地、⑥民家跡地の分譲住宅地、幼稚園跡地のアパート、⑦保育園跡地の分譲住宅地とした。

南東エリアは、宇都宮大学峰キャンパスの南東に位置する峰町、平松本町、東峰町にまたがる。同エリアは平坦な台地中位面に広がっており、昭和初期の地形図では畑よりも平地林が大きな面積を占めていることが分かる。同エリアでは1999年より「宇都宮大学東南部第1土地区画整理事業」、2007年からは「宇都宮大学東南部第2土地区画整理事業」が実施され、一部で道路網が刷新されて新しい住宅や店舗が立地するという大きな変化が見られる。一方、北エリアよりも手入れされた農地が数区画残存するほか、一帯では最大の面積となる平地林（雑木林）がエリアの南東端に残されている。

7つのチェックポイントは、①土地区画整理事業地の看板と仮設住宅、②畑とポンプ小屋、③コンビニエンスストアが対面立地する交差点、④平地林、⑤陸田とポンプ小屋、⑥都市計画道路の新設部分、⑦土地区画整理事業地の看板と分譲住宅地とした。

受講者は、いずれのエリアにおいても地図、衛星写真を活用しながら熱心に観察を行い、各チェックポイントにおいてどのような事象に注目すべきか、メンバーと意見を交わしていた。10グループ中6グループは地域住民に自主的にインタビューを行い、北エリアでは不在地主の所有地が広大な空き地になっていること、かつての畦道がそのまま狭隘な生活道路になり、農地の切り売りで小区画の宅地造成が行われ袋小路が多いことを、南東エリアでは広い平地林が私有地であり、県立高校の建設予定地とされていた時期があったことなどの情報を得た。

(3) 振り返りによる観察結果の共有と地域理解

グループごとに前述の3観点にもとづいて観察結果の共有と考察を行ったのち、グループの代表者が

振り返りの内容を発表した。以下では、受講者のワークシートの記述内容を分析した結果を示す。

エリア全体の特徴としては、北エリアでは「古い住宅地（旧集落）と新しい住宅地および集合住宅の密集地に分かれている」「大学に近く学生向けアパートが多い」「農地から宅地へと変化してきた」「無計画な宅地化により狭い道路が多い」などが挙げられた。エリア内で①新旧の住宅地、②駅東の商業地域と峰の住宅地、③稲作と畑作という差異が見出され、それぞれを分かち「さかい」として、江川（①②③の境界）、エリア西側を南北に貫く旧道（①および②の境界）、中央部を東西に貫く旧道（①の境界）、鶏峰神社（②の境界）が認識された。

受講者が注目した事物・事象を表2にまとめた。北エリアで観察を行った受講者の半数が、エリア内の土地の高低差に注目した。江川沿いでは河道に接する凹地を調節池であると推定し、その調節池の背後に一段高い場所に盛土を施して住宅が建てられていることに気づいた。さらに、国道4号より西の宿郷5丁目一帯が昔は湿地であったとの住民の情報を参考に、神社や旧家が江川以西よりも土地が高く、浸水リスクの少ない旧道沿いに立地していることを理解した。あるグループは、鶏峰神社の境内にある古い石碑に刻まれた奉納者の姓が、旧集落の旧家と同姓であることを指摘した。また、旧集落に特徴的な景観要素として、大谷石の塀、屋敷林、倉や門などが抽出された。

なお、表2に記載しなかったが、旧集落に居住し、農地改革以前は一帯の農地を多く所有していた「地主」や、都市計画基本図に記載されているものの2014年に閉園となり、跡地に世帯向けのアパートが建設された「幼稚園」も5～6名がワークシートに記入していた。後者について、あるグループは、「幼稚園がなくなり医院が拡張され、保育園が存続している⁽¹²⁾ことから、少子高齢化や核家族化が進む社会のニーズの変化が読みとれる。空地・空き家等を加えて現代社会の問題を考える材料となる。」と発表した。

他方、南東エリアの全体的特徴としては「区画整理事業による宅地・道路網の整備」が挙げられた。受講者は、土地区画整理事業が終了した区画と進行中または未着手である区画を、住宅の新旧および道路の幅員と直進性によって明瞭に区別し、両者の境界をエリア中央部を南北に貫く都市計画道路（表2

表2 野外観察で注目した事物・事象

北エリア			
	事物・事象	回答数	割合(%)
地形	高低差・傾斜	14	50.0
	台地・段丘	3	10.7
植生	畑	6	21.4
	屋敷林	4	14.3
	タケ	2	7.1
	スギ	1	3.6
	ケヤキ	1	3.6
河川	川	16	57.1
	調節池	8	28.6
	盛土	6	21.4
	水門	3	10.7
	橋	2	7.1
建物・設備	鶏峰神社	16	57.1
	旧家・豪農・広い屋敷	11	39.3
	塀(大谷石)	9	32.1
	アパート	7	25.0
	長屋門・倉・付属舎	7	25.0
	新興住宅(地)	3	10.7
	店舗・飲食店	3	10.7
	医院	3	10.7
	墓地	2	7.1
	石碑(奉納者名)	1	3.6
交通	道幅・狭い(細い)通り	6	21.4
	袋小路	3	10.7
	旧道	3	10.7
低・未利用地	空き家・廃屋	10	35.7
	空き地	7	25.0
	駐車場	7	25.0
	シャッター街	1	3.6
南東エリア			
	事物・事象	回答数	割合(%)
植生	平地林	9	81.8
	水田	7	63.6
	畑	4	36.4
	農地・田畑・圃場	3	27.3
	区画整理事業	9	81.8
建物・設備	新しい住宅(地)	4	36.4
	コンビニエンスストア	3	27.3
	敷地の広い家	2	18.2
	ポンプ小屋	2	18.2
	アパート	1	9.1
	マンション	1	9.1
	ドラッグストア	1	9.1
	飲食店	1	9.1
	美容院	1	9.1
	大谷石	1	9.1
電柱	1	9.1	
交通	側溝	1	9.1
	狭い(細い)旧道	6	54.5
	新しい幹線道路	5	45.5
	信号機がない交差点	4	36.4
	道幅	4	36.4
未利用地	交通量	4	36.4
	バス路線	2	18.2
	空き地	3	27.3
	保留地	1	9.1

受講者のワークシートより作成

中の「新しい幹線道路」であると判断した。観察では、コンビニエンスストアが向かいあって立地する都市計画道路の交差点に信号機が設置されていないこと、旧来の幅員の狭い道路の交通量が予想以上に多いこと、下草の手入れがされた広い平地林や、揚水ポンプによって灌漑されている陸田が残っていることに注目が集まった(表2)。そして、同エリアを授業で取り上げるなら、児童・生徒には道路の全面開通後の交通量や地域間のつながりがどう変わるか、将来どのような町になっていくかを考えさせたいという意見が出された。また「農地や林地がすべて宅地化されるのは寂しい。自然や、せめて公園などの緑地を残しておくべき。」という意見も述べられた。北エリア・南東エリアともに、フィールドワークをつうじて持続可能なまちづくりに関する学習活動へと発展させられる地域素材を得たといえよう。

4. 講習の意義と課題—むすびにかえて—

(1) 受講者による講習の評価

免許状更新講習受講者評価書をもとに、2018年度と2019年度における本講習受講者の事後評価を図4に示した。図中の項目Iは、「本講習の内容・方法についての総合的な評価」、項目IIは「本講習を受講したあなたの最新の知識・技能の習得の成果についての総合評価」である。いずれの項目も「不十分」という回答はなかった。2018年と2019年と比較すると、内容・方法にかかわる項目Iで「よい」の評価が+16.9%と目立って増加した。評価基準の「よい」に3点、「だいたいよい」に2点、「あまり十分でない」に1点を与え、評価の総点を受講者数で除した平均値を求めると、項目Iは2018年が2.78、2019年が2.97、項目IIは2018年が2.80、2019年が2.87となり、項目Iの評価の上昇が相対的に大きいこと

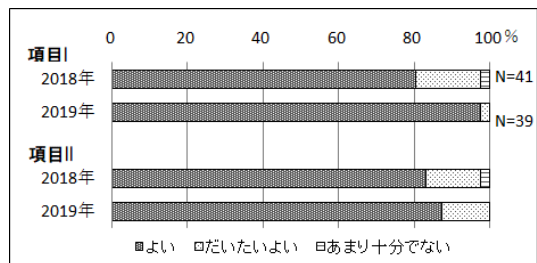


図4 受講者の事後評価
免許状更新講習受講者評価書より作成

表3 事後評価自由記述欄の出現語

2018年度	
出現語	出現回数
活用	14
授業	12
地図, 勉強	8
使える	7
学習, 教える, 知る, 地理	6
教材, 研究, 講習, 使う, 子ども	5
たくさん, データ, パソコン, マップ, 楽しい, 資料, 自分, 先生, 地理院, 内容, 分野	4
2019年度	
出現語	出現回数
フィールドワーク	23
楽しい	11
授業	10
講習, 時間, 内容, 有意義	9
先生	8
参考, 生かす, 地理, 勉強	7
学習, 活用, 考える, 視点, 自分, 生徒, 知識, 地図	6
研修, 講義, 指導, 実際, 受ける, 利用, 良い	5
学ぶ, 興味, 更新, 実感, 社会科, 多い, 体験, 大切, 調査	4
免許状更新講習受講者評価書より作成	

が明らかである。すなわち、フィールドワークを導入したことが受講者のポジティブな評価につながっていた。

免許状更新講習受講者評価書の自由記述欄の記入者は、2018年度が受講者41名中23名、2019年度が39名中36名であった。2018年度の受講者は、講習の時間内に身近な地域に関する教材を仕上げてファイル形式で提出しなければならなかったため、自由記述欄に記入する時間を十分にとれなかったと思われる。以下では受講者が書いた文章を、テキストマイニングソフトのKH Coderを用いて分析し、記述内容の傾向性を読み取っていく⁽¹³⁾。表3には、2018年度と2019年度の自由記述欄に書かれた単語のうち、出現回数4以上のものを掲載した。まず2018年度に最も出現回数が多かったのは「活用」、次いで「授業」であり、講習で取り上げた地理院地図、空中写真、今昔マップ等を早速実際の授業で活用したいという文脈が共通して認められた。また、「地図」「使える」「学習」「地理」「教える」「教材」「研究」という語を使った記述においても、これらの地理情報を使った教材づくり、教材研究に取り組みたいという意欲が表明されている。「データ」「パソコン」「マップ」「資料」については、PC端末での地図や資料の閲覧を行ったことを表す語である。

一方、2019年度に最も多く使われた語は、講習内容そのものを示す「フィールドワーク」であり、それだけ受講者の印象が強かったといえよう。次に出現回数が多い「楽しい（楽しく、楽しかった）」の使用箇所は、フィールドワークを含む講習の内容に関するものが6か所、地理を学ぶ楽しさにふれたものが5か所であった。「有意義」という語も、講習全体をさすものが6か所、直接フィールドワークにかかるものが3か所であり、両方の語の出現回数が2018年度の4回と1回を大きく上回っていることは興味深い。講習で学んだ知識・技能を、実際の授業に生かしたい、活用したいという文脈は2018年度同様多く見られたが、2019年度に特徴的と思われる語は「先生」と「視点」である。「先生」が使用された8か所のうち6か所は、フィールドワークと振り返りを行った同じグループの他の受講者をさすもので、知識量の多さに驚いたり、多くの刺激を受けたという感想が書かれていた。フィールドワークをとおして教師どおしの学びあいが行われたことが、講習の充実につながったといえる。「視点」については、児童・生徒の地理への興味づけや、地理が楽しくなるような視点を新たに得たと書かれていた。座学で行う講習前半の講義内容は2018年度と

大きく変えていないが、後半のフィールドワークで地域の特徴を読み取る際に、学んだ視点を働かせる体験をしたことが、このような感想につながったのであろう。

(2) 指導場面における講習の意義と課題

2019年度の講習では、フィールドワーク後の振り返りのワークシートに、「午前中の身近な地域を知るためのデスクワークに加えて、午後のフィールドワークによって新たにどのような知見が得られましたか。その知識は、実際の指導場面でどう役立てられそうですか。」という問いを設けた。すなわち、本講習を受講した意義を問う設問であり、受講者の回答をKH Coderを用いて分析した。

図5は、出現回数4以上の単語について、上位60の共起関係を描画したものである。計10の共起ネットワークが見いだされ、互いに共起関係にある4つのグループについて以下のように解釈できる。

第1のグループは出現回数の多い「フィールドワーク」「地図」「実際」「見る」「歩く」「子どもたち」「歴史」等の語で構成される、フィールドワークの有用性に関する知見である。地形図・衛星写真を携えて実際に地域を歩いて見ると、地図や写真だけでは分からない情報を多く得ることができる。子どもたち(児童・生徒)にも講習での自らの学びを追体験させ、歴史学習ともリンクさせられるように、どのように

変化してきたのか、なぜそうになっているか、これからどう変わっていくのかを考えさせて、地域理解や地理の楽しさにつなげたい、という希望が読み取れる。

第2のグループは、午前中の講習で得た地理的技能的の活用に関するものである。「地形図」「空中写真」「今昔マップ」によって、「地形」や土地の歴史の変遷を確認することが、フィールドワークとあわせて重要である、という認識である。

第3のグループは、今回の講習において、身近な地域や生活圏に関する学習の指導場面に今後取り入れたいと感じた「視点」や方法である。「新旧」の土地利用の「比較」や、「住宅」「道幅」などフィールドワークでの観察の視点が挙げられている。

第4のグループは、深い学びへの展望である。午前中の地形図や空中写真からの情報と、午後のフィールドワークを有機的に結びつけ、学校周辺の昔の様子をイメージしたり、実際の様子を観察したりすることで得られる様々な情報や知識から、児童・生徒の「主体的」で「深い学び」につなげられるのでは、と述べられている。

以上のように、受講者は講習で得た知見を実際の授業に活かすことに非常に意欲的であるが、現実の指導場面での活用を想定した場合に、今回の講習では不十分な点が挙げられる。

1つめは、地形図や空中写真等の地理資料を読み

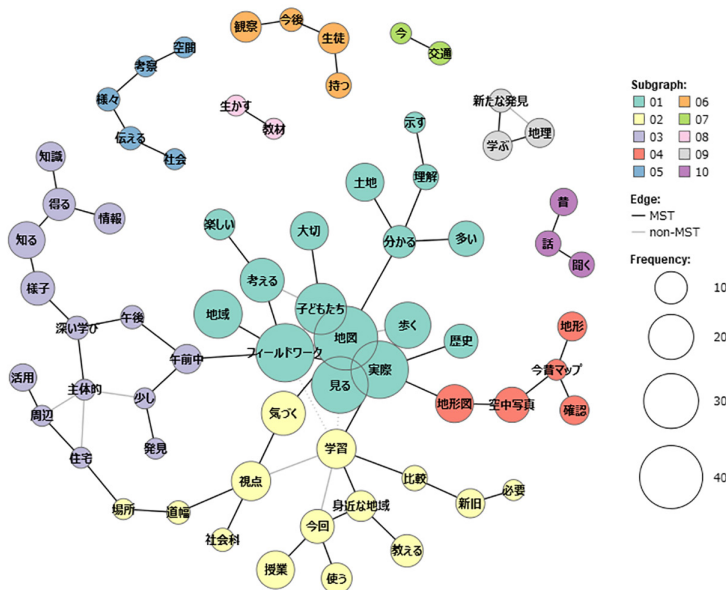


図5 講習で得た知見に関する出現語の共起ネットワーク
受講者ワークシートをもとにKH Coderによって描画

取るトレーニングが量的に不足していることである。本講習は地理を専門としない教員の地理的な資質・能力を高めるため、地形図や空中写真、それ以外のさまざまな主題図の利用価値を知ってもらうことに重きを置いている。各自が興味をもちやすい勤務校周辺（転任1年以内の場合は、前任校を対象とすることも認めている）を電子地図の閲覧対象区域とし、受講者全員が共通に同じ地形図を読むのは、フィールドワークを行う宇都宮大学周辺に限られる。訪問や観察が容易には行えない日本の諸地域や外国の様子（修学旅行の訪問先など）を、地図や写真資料を手がかりに受講者全員で読み解く、ワークショップスタイルの演習を行うことが望ましい。

2つめは、フィールドワークの対象エリアを2つ設けたことと、グループでの振り返りの時間を設定したことで、講師が現地、あるいは事後に解説する時間を十分に持てなかった点である。講師が同行しなかった北エリアにおいては、鶏峰神社のある場所が古墳ではないかという誤解や、北東部の畑一帯が市街化調整区域である（ゆえに、開発が進まなかった）という誤った情報にもとづく発表がなされていた。観察や聞き取りをもとに、グループで仮説を立てて協議する経験は非常に重要であるが、正確な事実が分からないまま終わらぬよう、講師は各グループの発表を聞き終わったのちに、十分な解説を行うべきである。

以上の意義や課題を踏まえ、講習を受けた教員が地域学習における指導場面で、児童・生徒の地理的な見方・考え方を十分に育成できるよう、知識・技能を活用する体験重視型の講習に引き続き取り組みたい。

註および参考文献

- (1) 学術雑誌において下記の特集が組まれている。特集これからの地理教育—持続可能な社会づくりのための教科へ、科学, 88, pp.134-174 (2018). 特集1地理総合と歴史総合—何が変わるのか、どう向き合うのか—, 学術の動向, 24 (11), pp.9-35 (2019).
- (2) 竹内裕一, 「地理総合」を支える系統的な教員研修の必要性, 経済地理学年報, 64, pp.243-249 (2018).
- (3) 井田仁康, 高等学校「地理」の動向と今後の地理教育の展望, 人文地理, 68, pp.66-78 (2016).

- (4) 香川貴志, 高等学校地理歴史科「地理総合」必修化に向けての中学校社会科地理的分野の再考察, 京都教育大学紀要, 135, pp.81-93 (2019).
- (5) 泉 貴久・岩本廣美, 地理学会の社会貢献活動と地理教育, E-journal GEO, 7 (1), pp.74-81 (2012).
- (6) 植木岳雪, 教員免許状更新講習による地理のアウトリーチ—体験型講習の実践—, E-journal GEO, 13 (1), pp.251-272 (2018).
- (7) 秋本弘章・橋本雄一・河合豊明, 「地理総合」とGIS—その意義と汎用・基礎データの存続・課題と支援・実践, 学術の動向, 24 (11), pp.18-22 (2019).
- (8) アンケート調査は、依頼文と調査票を栃木県中学校教育研究会社会部会の事務局を通じて、県内の全公立中学校宛てにメールで配信した。調査対象となる2018年度の社会科教員数は400名で、回答率は18.5%であった。井上知也, 「身近な地域の調査」の授業の実践方法について, 平成30年度宇都宮大学教育学部社会科教育専攻卒業論文 (2019).
- (9) 教員免許管理システム運営管理協議会, 更新講習検索サイト <http://www.kyoin-menkyo.jp> (2020年3月23日最終閲覧)
- (10) テキストには下記を使用した。イザベラ・バード著, 時岡敬子訳, イザベラ・バードの日本紀行(上)(下), 講談社学術文庫(2008).
- (11) 受講者の勤務校の校種内訳は、小学校が20名、中学校が9名、高等学校が8名、特別支援学校が1名であり、その他は県教育事務所が1名であった。
- (12) 幼稚園に隣接する区画では、2011年以降、北エリア内から医院が移転新築され、当該医院が移転前に入居していた集合住宅1階のテナントには、保育園の分園が開設される、という変化があった。
- (13) あらかじめ「思う」「感じる」「ありがとう」「大変」は分析対象から外している。

令和2年4月1日 受理

Improvement of Local Area Learning in Social Studies through Fieldwork on Certificate Renewal Course

Keiko MATSUMURA